

今日の福音書は、成長する種のたとえとからし種のたとえでした。神の国は、土に蒔かれた種のようなもので、農夫は夜昼、寝起きしているうちに、何もしなくても、芽を出して成長する。人の力は働かなくても、土はひとりで成長させて、収穫の時が来る。その成長ぶりは、小さなからし種が、どんな野菜よりも大きくなることでたとえられる、という話です。

大変楽観的なお話で、このたとえ話に頼っていていいものだろうか、と勝手に思います。イエス様がこの話をされた、伝道活動の最初の頃や、この福音書が作られた、キリスト教迫害の時代、みんなは現状や将来について、悲観的な状況にあったので、不安をあおるような話より、安心させるお話で、みんながイエス様に頼る、ということになっていったと思われます。

しかし、現在の教会の情勢に対しても、同じことを言っていて大丈夫なのだろうか、と不安な気持ちになります。成長するのではなく、衰えを感じる時に、この話は、どう受け取れるのかということです。

今日の成長する種のたとえでは、農夫が知らないうちに、神の国である種は、多くの実を結ぶものに成長して行くのですが、教区は知らないうちに、大変な財政面での危機的状況になってきました。

3年ほど前の教区会で、とても財政的に厳しいので、50年以上、手を付けずにいた宣教推進基金の、6000万円のうち、2000万円を、財政が厳しいときに使えるように、基金から資金に移動させる決議をしましたが、すでにそのうちの半分、1000万円程度使っていて、今後のことを考えると、悲観的になってきます。そんな状況の中に私たちはいるのです。

今日の福音書を、そのまま素直に読めば、「土はひとりで実を結ばせる」のであって、「夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。」と書かれています。

ですから、人は自分で努力していない。人の努力とは関係なしに、種は成長する、ということになります。だから、逆に、人間の努力が、成長を妨げるようなことになっているのではないか、と思わされたりします。それじゃ、私たちは、どうすればいいのだろうか。何もしない方がいいのだろうか。

しかし、私たちは、今日の福音書を「神の国」のたとえとして、素直に読み過ぎているのかもしれませんが。「神の国」とは「教会のこと」と、短絡的に思い違いをしているのかもしれませんが。「九州教区の教勢」ということを「成長する種」や「からし種」と考える読み方が、まちがっていたのではないかと私は思いました。

というのは、今日の福音書が書かれているマルコによる福音書4章は、「種を蒔く人」のたとえから始まり、「ともし火」と「秤（はかり）」のたとえと続いて、今日の「成長する種」と「からし種」のたとえに続いているのです。

最初の「種を蒔く人」のたとえの最後に「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われています。「種を蒔く人」のたとえの説明部分では、「種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである」と言われ、また「ともし火」と「はかり」のたとえでは、また「聞く耳のある者は、聞きなさい。」となっています。そして、今日の福音書でも「イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。」という言葉が出てきました。

結局、この4章に出てくる「神の国」とは、教会のことではなく、人々の中に蒔かれ、育っている、御言葉のことなのでしょう。それが、成長するように、「聞く耳のある者は、聞きなさい。」と言って、御言葉を語られている、ということなんだろうと思ったのです。

もうだいぶ前のことですが、用があつて福山の家に帰ったのですが、当時広島で牧師をしていた弟、現在は神戸教区の主教になったのですが、その弟も帰ってきて、神戸教区が各教会にお願いしている、宣教協議会についての問いかけの話をしてくれました。

神戸教区では、各教会にいろんな質問をしているのですが、そのひとつに、「あなたの教会は、周囲の人々から、どのように見られていると思いますか？」という質問と、「あなたの教会は、周囲の人々から、どのように見られたいですか？」という質問があつたそうです。

当時九州教区は、「わたしたちがどうなりたいか」という視点で、五年後の夢を考えていたのですが、隣では、「まわりの人々は、教会に何を期待しているのか」という視点から考えているのです。

「同じことを考えている」と思うかもしれませんが、両者の間には、大きな隔たりがあるように、私には思えました。九州教区の「五年後の夢」は、教区が若返って、経済的にも人材的にも、充実している状態を夢見ます。それは各教会の切実な願いでしょう。

しかし、まわりの人々にとっては、「そんなことは関係ない」わけです。その頃、私は宗像の教会にいたのですが、近所の人々とのかかわりが薄くなっていることを感じていました。

教会が伝道所としてできた頃は、小学校の前にあるので、日曜学校にも大勢子どもがきていました。ところが始まってから4年目、オウム真理教の事件が起きました。あの事件をきっかけに、教会の周辺の人々は、子どもを日曜学校に通わせなくなりました。社会は、教会がそのような子どもを集める活動することを、喜ばない傾向はずっとあるのではないのでしょうか。

ところが、神戸教区のある教会では、教会の周辺には独居老人が多い、ということで、その人たちの現在とこれからの不安に対して、何か奉仕できないか、ということが話題になったそうです。皆さんは「就活」という言葉を聞かれたことがあるでしょう。学生の「就職活動」を指す言葉ですが、それとは違う、「終活」、人間の終焉期、終わりのための活動、というものを都会の教会では考えてはどうか。キリスト教での死生観や葬式の実際についての話です。都会の独居老人は、宗教へのしがらみがない一方で、生活の不安、今後のことなど、いろいろ悩みがある。それに、教会が相談に乗れるように取り組めるのではないか、という話でした。

その教会は、ホームレスの人々への救援活動のために、炊き出しなどを行っているのですが、そのような地味な活動が、周辺の人々から信頼を得られるようになって、そんな、終わりのための活動も考えられるようになったのでしょう。

私の母も、2年前まで福山で一人暮らしでしたので、そんなことから、よくわかる気がしました。私の母はとても活発な性格で、認知症になった父を病院へ連れて行ったり、教会の郵便物を車で信徒宅に配ったりしていましたが、耳が遠くなってきて、教会の説教も聞き取れない。人々との交わりの中に入ることも困難なので教会に行くのがあまり楽しくないらしいのです。また80歳になった時、車の運転を「事故をしない前に辞めることにした」と言って、手放しますと、本当に一人で家に閉じこもるようになってきたのです。

何とかしてやらないと、と思って、その頃から、私は自分の説教を郵便で送るようになったのです。また、他人の話を聞けないけれど、ひとりで本を読む方が楽しくなってきました。それで説教を送る時、時々、吉沢久子さんとか、五木寛之さん、やなせたかしさんなどの読みやすい本を送ると、ナント着いた日の夕方から、その本の終わりが来るまで、夜中の2時頃まででも読んでいます。そして週に1回、土曜日にやってくるヘルパーさんが、母の読んでいる本を見つけて、今では何冊も借りて行って、読んでいるというのです。そして今は、施設に入っているので、郵便などが届くと嬉しいのでしょう。

皆さんは黄金律というのをご存知でしょう。

『人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。』（マタイ7：12）

これについての辞典の説明では、

そこには、人間関係の本質が最もよく語られている。そして、その黄金律の根底となるものとして、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」（レビ19：18）という戒めがある。イエスがその戒めを具体的にしかも積極的に語られたのが、この黄金律であると言うことができよう。それゆえに、それはクリスチャンの倫理、つまり人間関係の基本であると言うことができる。

このような説明がありました。

今、まさに教会は、周囲の人々にとって、よき隣人であるかどうか、ということが問われているのです。

わたしたちが、伝道しようというのではなく、この黄金律の御言葉を心に植えて、周りの人々のよき隣人になろうとする時、神の国は、わたしたちが気づかない間に、成長する、ということがあるのではないのでしょうか。